

ミクロネシア地域の言語における日本語起源借用語の比較研究

今村圭介, ダニエル・ロング

筆者らはこれまで、ミクロネシア地域の旧南洋群島において日本語起源借用語(JOL)の収集、記述、分析に努めてきた。本研究は JOL の言語間の類似点および相違点を記述し、その社会言語学的な要因を考察しようと試みるものである。チャモロ語、カロリン語、ポナペ語、チューク語、コスラエ語、マーシャル語、ヤップ語、パラオ語を主な考察対象として、それぞれの言語の JOL の特徴を比較考察する。まず各言語に取り入れられた借用語にどのような類似点があるのか、統計手法の数量化 III 類にかけ、分析した。結果として、ミクロネシアの諸言語で取り入れられた JOL は類似していることがわかった。また、数量化の散布図と各言語が話されている地理的な位置が類似しており、JOL の取り入れられ方に地理的な類似関係があることが浮き彫りになった。次に、意味変化に関して、言語間で見られる類似点とその発生原因を考察した。意味変化は地域的な類似点は少ないと考えられるが、共通する意味変化が見られた。その原因として語形の「二次的借用」(変化した意味の伝播)、「古形の残存」、当時の「類似社会環境」が考えられた。次に取り入れられた JOL の音韻的特徴を、ミクロネシアの多くの言語にない /z/、/h/、/f/ から考察した。結果、パラオ語、ヤップ語、カロリン語に見られたのに対して、他の言語には見られなかった。音素の新規作成は、日本人人口の割合の高さやリングフランカとしての日本語の使用頻度などから、日本語との強い言語接触があった言語に見られると考えられた。また、形態変化や派生について比較考察したところ、形態変化や派生は借用語の数が多い言語により多く見られた。JOL が多く取り入れられれば、それだけその言語の一部と受け入れられ、その結果派生や形態変化が起りやすいと考えられた。